

つなげて つながる 命との出会い

大和郡山市立矢田南幼稚園 奈良県

ここが
Point!

生き物にとっても私たちにとっても「よりよい」を求めて

小さな命（チョウのたまご）をつなぐために、試行錯誤する子どもたちの姿がいきいきと描き出されています。子どもたちは日常的に、ときには年中・年少クラスも巻き込んで発見の喜びや課題を分かち合っており、命をつなぐ探究のなかで子ども・大人のつながりが育まれていました。子どもたちが羽化の瞬間に立ち会えるように手を尽くしたり、長期にわたる探究を記録・分析したりする先生方の支えも見逃せないポイントです。特筆すべきは、探究の中心に「よりよい」の模索という視点があることです。思うようにいかない事態に直面しても前向きに次を考える、自然の中で生きるチョウのあるがままを尊重しようとする子どもたちの姿勢は、みんなにとって「よりよい」あり方を実現しようという気持ちの現れのように思えます。「よりよい」を考えること、それは科学の原点ではないでしょうか。

“自然”というものを心から敬い、畏敬の念をもち、“よりよい”を考えていくことこそが、科学する心を育むことである。自然とともにある暮らしを喜びとし、“よりよい”を考えていく毎日を子どもと共に積み重ねたい。

小さな命を守りたい

5 歳児 / 令和6年 4月～7月

4月、バタフライガーデン（チョウの食草がいっぱいの庭）にやって来たたくさんのチョウに大喜びの子どもたち。チョウが姿を見せるたび、「あ、ちょうちょ！」「ちょうちょ来てる！」「バタフライガーデン、大成功やな」と言っていた。5月頃、アゲハチョウがよく来るようになり、時折、お尻を葉っぱに付けている。子どもたちは、少しずつ花やミカンの木にとまっているチョウの様子を見るようになってきた。

たまごとの出会い

5月20日（月）朝、ミカンの葉のハモグリガの幼虫の迷路を見ていたA児が、A保育者と一緒に「これ何？」「こっちにも」「こっちもある」「ひょっとしてたまご？」とアゲハチョウのたまごがたくさんついていることに気付く。みんなでもたまごを見つけ、「これかあ」「あった」「ここにも」「ここにも」と喜ぶ。その後、たまごから小



さな1匹の黒い幼虫が生まれていた。「ちっこいやつ、生まれてた」と嬉しそうに見つめ、子どもたちの中に、少しずつゆっくり大きくなっていく幼虫を楽しみにする気持ちが芽生え始めた。

大事件！ どこにいったの？！

5月30日（木）幼虫は成長し、4齢幼虫になっていた。しかし「あれ幼虫は？」「どこ？」姿が見えない。迎えに来た母親たちも探してくれたが姿は見えない。「どうしちゃったんだろう」と言っているとB児の母親が「あ！ちっちゃいの生まれてる」と小さな幼虫を発見した。B児「こっちにも！」と発見。B児とC児が「明日、みんなに知らせよう」「大事件や」と言う。

子ども会議 あの子はいったいどうしたんだろう？ 新しく生まれた幼虫は？

翌日、B児とC児から話を聞いて、みんなで探すが見付からない。がっかりしながらホールに集まり、話し合う。「あの子は一体どうしたんだろう？」「鳥に食べられたのかもしれない」「カマキリかも」など、子どもたちは考えられる生き物を思い浮かべ、想像を膨らませる。このままにしておくと、新しく生まれた幼虫も、食べられたりしたら大変だ！と子どもたちは対策を練り始めた。A児が「あ！ゴミにかけてある網みたいなのをかぶせたら？カラス来ないようにかぶせてるやつ」みんな「ああ！」と納得の様子。B保育者が倉庫から4種類の“網”を持ってきた。

子どもたちは、網を触ってどれがよいのか考えた。「これは、くちばしが入るんじゃない？」A児が自分の指を網目の穴に差し込む。みんなもそれぞれ網に指を差し込み確かめる。「ほんまや。くちばし入ったらまた食べられちゃう」「これ、穴大きいわ」「こっち（緑）でもいいんじゃない？」。A児「これや。これがいい」。みんなも「どこからもくちばし入らへん」と白い網に決まる。年長の子どもたちは、帰りに網をかぶせ、朝来たら網を外す毎日が始まった。

ミカンの木についている虫たちをどうしよう

「開いてるところはないかな」とぐると網をかぶせ洗濯ばさみで止める。網をかぶせながら、「あかん、ワタムシがいる」「アリもいる」ミカンの木についていた



それらをみんなで一生懸命取って、その後相談が始まった。「たんぼ組さんやりす組さんに知らせないといけない」「ワタムシを見つけたら取ってここにに入れてもらおう」とケースを指さす。「クモいたよ」「アリもいたよ」「じゃあ、どうする？」と考えた。6月3日（月）朝、年長の子どもたちが、年中児・年少児に声をかけて、金曜日に話し合ったことを伝えた。

幼虫が危ない！

やがて幼虫は、緑の5齢幼虫となった。6月24日（月）降園前、かぶせていた白い網の外側でさなぎになろうとしていた幼虫を子どもたちとB保育者が見付ける。「（網から）出てる！」「危ない！」と、ミカンの木に戻そうとした（この時、幼虫はミカンの木を離れ、さなぎになる場所を探すのだとは知らなかった）。しかし、何度付けてもミカンの葉に幼虫は付かず、くにかくにやとし弱ってきた。このままだと死んでしまうと考え、最後の手段として飼育ケースに幼虫を入れることにした。ベちゃとしたウンチが葉っぱに付いているのを見つけたA保育者。「大変、もうさなぎになる！このウンチをたくさんしたら、さなぎになる！」と思わず声をあげた。何度もケースをのぼろうとするが、落ちてしまう幼虫。命を守る一大事の瞬間に、保育者も何とかせねばと、ガーゼを垂らす案を子どもたちに提示した。子どもたちも賛成し、ガーゼを垂らしたところで降園時間になってしまったため、B保育者は動画を撮り始めた。

どうやって登ったの？

翌日、頭をあちこちにぐにぐにや振りながらガーゼを登ろうとする幼虫の動画を見る。子どもたちは、「あ、登ったね」「もにやっ、もにやっ、て上がっていく」と幼虫を応援した。「もうすぐさなぎやな」「さなぎってどうやってくっつくのかな」など話す。その後、幼虫はこげ茶色のさなぎになった。追うようにして、もう一匹の幼虫もミカンの木から姿を消した。数日後、年中児がバタフライガーデン近くの廊下の壁のへこみにさなぎを見つける。「ここにいたんや」「無事やった」と喜び、網をかけておいた。

もうすぐ生まれるかも！

7月5日（金）、A保育者と子どもがさなぎをのぞいてみると、なんだか少し膨らんでいるように見えた。「もうすぐアゲハになるかもしれない」「よくみんなが見えない間にチョウになるから、静かにしとこう」とみんなで静かに過ごした。さなぎを囲んで「まだやな」と確認しながら弁当も静かに食べたが、とうとう降園時間。残念ながら土曜日じゃないかと思ったA保育者は、「土曜日、日曜日に生まれたらどうしよう」と子どもたちに相談する。子どもたちはA保育者に託すことにした。「先生、見といてね」「頼むね」。アゲハチョウの命を任されたA保育者は、ダンボールに飼育ケースを入れ、動かないよう梱包材で固定して家に持ち帰った。

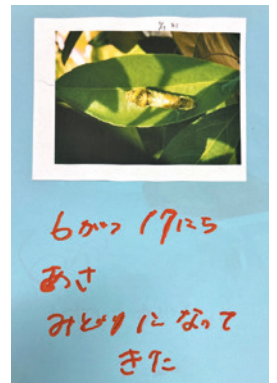
アゲハチョウの誕生

翌日7月6日（土）、大切な役目を背負ったA保育者は絶対に録画をしようと朝6:30に「アゲハチョウは？」と起きると、生まれたばかりのとても大きなアゲハチョウがいた。やってしまった！と思い、急いで動画を撮る。生まれたばかりで羽はベロンとしていた。次第に羽は乾き、閉じたり広げたりするようになる。しかし、お昼にアゲハチョウはバタバタと暴れ出した。できたら月曜日に子どもたちと一緒に見たい、しかしチョウは大暴れ。

弱らせてしまったらどうしよう。A保育者は葛藤した。そしてB保育者に電話で相談。大切に育てた命。動画を撮りながら逃がすこととなった。

元気でいてね

7月8日（月）、登園した子どもたちと、みんなで動画を見る。「羽、ふにやふにやや」「震えてる」「羽かたまってきたかな」「（羽）開いた！」とじっと見つめる。バタバタと暴れるアゲハチョウを見て、「かわいそう」「怒ってる」「外に早く出して！」「出たいよ」と体を揺らしながらアゲハチョウの気持ちになってつぶやく。チョウが飛び立つ場面では、「あ、飛んだ」「よかったな」と友達と顔を見合わせ喜んだ。その後、これまで撮影した写真を集め、日付やチョウと共に暮らした中での発見を書いた『あおむしにつき』が出来上がった。



『あおむしにつき』

考察

夢いっぱいにつくったバタフライガーデン。チョウが来た！と喜んだものの、現実には、厳しいものだった。チョウになることはとても大変なことだと思い知った。自然豊かな本園には、チョウにとっての天敵も多かったのだ。その中のほんのわずかに育っていく命を子どもと保育者が共に大切にしようとした。育っていく命の中に、消えていく命がたくさんあることを保育者だけでなく子どもたちも五感で感じたように思う。だからこそ、今、目の前にある命を大切に守らなければ、と思う気持ちがより膨らんだのではないかな。チョウの命との出会いは、私たちの心を揺さぶった。子どもだけでなく、保育者である私たちも、生き残る命のすごさに心動かされた。保育者もまた、夢中になって見たり調べたりした。驚きの連続であった。幼虫との暮らしの中で、生きていることの神秘さ、不思議さ、偉大さとともに、力強く生き残っていく命に畏敬の念を抱くこととなった。

「科学する心」を感じた 小さなつばき



3歳児

雪、白やのに透明になった。
ここに落ちたら色変わるの。
緑のところは積もっていくのに。
不思議～

緑のマットを敷き詰めたところに落ちた雪は白く積もっていくのに、止水栓のふたに落ちた雪は白から透明に変わること気が付き、不思議～と感じていました。まっさらの目で自然を見る目・感性に心動かされました。

実践の背景や全体像、
園の先生による事例分析や考察は
論文をお読みください。

